

八幡大菩薩の世界

入江 英 親

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館建設にあたってはその場所を宇佐神宮との隣接地、または古墳等の群在する遺跡付近に選ぶこととし、結局現在の位置に決定した。こうして昨年は開館してから五周年を迎えたので、その記念として同館では「八幡大菩薩の世界」展を開催した。まことに宇佐風土記の丘に相應しい企画であった。県内はもちろん県外からも、八幡関係で国宝や重要文化財等に指定されている貴重な文化財を、多数集めて一堂に展示した。図録『八幡大菩薩の世界』はそれら展示物の解説をまかね、謎を秘めた八幡神の解明を試みたものと言う。

今回その書評を求められたので繕いて見ると、あとがきに「図録の検討会もこの一室のセンターテーブルで行ない、長時間の論議が何日にもわたって続けられた。そのため少々疲

れもしたが、大学のゼミを思いおこさせる楽しい会議でもあった」と記るされていた。要するにそれぞれの分野の専門的研究家が、慎重合議の上に編輯したものである。従って八幡大菩薩の研究としては、一応批判の余地なく整った最高峰の研究物と称えるほかは、弱輩の私にはおこがましくて批判などの出来よう筈もない。しかし折角与えられた機会だから的をはずれているかも知れないが、思いついたままの感想を二、三述べさせていただくことにした。

八幡様と言えば未だに戦争を思いおこす人もいるだろうが武とはもともと戈を止めるの意で、老骨の私共には平和の神であった。稲荷様や琴平様のように民衆の中に融けこんだ神様である。それに相應しく表紙の装丁は、内容が学術的図録とは思えぬほどに明るく民衆的な香りがする。むしろ甘い宇佐飴の外箱を思わせぬでもない。上方左端のローマ字はキザな横線だと言ったところ、あれは「風土記の丘」ですよとN君は笑った。

巻頭口絵の僧形八幡神坐像の説明を、宇佐神宮本殿とはどうした間違いかと思ったところ、それは私の見間違いであった。何とか説明記入のよい方法はなかったらうか。

同く口絵の放生会の大きい写真と、26頁の傀儡子舞の写真は取り除くべきではなかったかと思う。古要神社でも古表神社の傀儡子でもない人形を、神職が両手に奉持して舞の姿を示すとは、全く伝統的神事の打ちこわしである。あのような人形を持つての所作は、終戦後の新作舞踊と思われる。新興宗教の行事であればいざ知らず、宇佐神宮の神事には不適当だと思ふ。公的な歴史民俗資料館発行の図録に所載されたとなれば、資料館がこれを認めたことにはならないだろう。映画で観衆を笑わせる狩衣姿の俳優が、祓いの大麻を打ちふるようなものである。ちなみに宇佐神宮の夏越の神事にこの頃ヒミコの行列が参加するが、これは神宮の神事ではなく、婦人会の余興の踊りと同様に、氏子が神賑いとして参加するのであるから、それはそれで結構なことである。

弥勒寺遺跡の写真は、以前発掘したものをも取りあげて欲しかった。たとえば経堂跡(もとの東塔跡)の軒下に小石を敷きつめた美しさの紹介の方が、遺跡としては効果的ではなかったろうか。以前の発掘あとは保存のために土で覆うてあるが、今はその上に檜が植えられている。神宮の方にはその点何度か話したが、聞き流されてそのままになっている。今は

根がはびこつて昔の状態は、恐らく破壊されてしまつてゐることかも知れない。

「おおいの八幡社」の項の中に、石清水八幡のご分霊をおまつりした国見町伊美の別宮社については若干記載してあるが、これと境を接して对象的に、宇佐神宮のご分霊をおまつりした香々地町の別宮社については、何故一言もふれなかつたのだろうか。また豊後高田市鎮座のもと眞社若宮八幡神社は、国東半島では最も古い大社の部類であり、行幸会には宿泊の場所でもあつた。宇佐神宮とは密接な関係にあり、冬の川渡し神事には下宮のお旅所に御神幸になるが、その途中の浜町の通りには、神を植えた常設の宇佐神宮遙拝所がある。下宮のお旅所は二室からなり、向つて左の御座には宇佐神宮のご神体を安置することになっている。またお旅所の後方には宇佐神宮勧請場の施設がある。このように極めて関係深い神社については、是非解説をお聞かせ願ひたかつた。

以上前記は枝葉末節のことのみであるが、聖地御許山の解説では、三体のご石体は別で、その下の拝殿のみが大元神社と誤解する恐れはないだろうか。また蘆枕の記述は大麥面白いが、黄金の「御体」と蘆枕(御験)、御神像との具体的関

係。御許山の馬蹄石と薦神社の御足跡石の意義など、なお拝聴したいことばかりである。

『八幡大菩薩の世界』を読んで、思い浮かぶままを取り留めもなく書き連ねて見た。実は読んだとは言え何もかも理解出来るほど熟読したわけではなく、的を射た書評はむしろ宇佐風土記の丘歴史民俗資料館で発表した新刊紹介が要を得ているので、次の通りそのまま使用させていただくことにする。

——開館5周年記念事業とした「八幡大菩薩の世界」展の列品解説を兼ねて刊行したもの。その内容は、八幡神成立の歴史を含めた「八幡神の成立」にはじまり、その展開を「神仏習合と八幡神」「八幡信仰の拡大と蒙古襲来」の2部に分けて、やさしく詳述。多数の写真、地図、図表なども理解を助け、好評である。巻末のユニークな年表もよい。なお、5年ごとに「八幡展」を開催の予定で、いわば「八幡文化叢書」の第1集ともいえるものである。——と。巨視的とか学際的とか、たまには私共には耳なれない言葉も出てくるが、全体的に平易な表現で、しかも高級な内容のある八幡様全体についての概説である。八幡様にご関心のある人は勿論のこと、無
い人には特に是非ご一読をおすすめしたい。

(県文化財保護審議会委員・XXXXXXXXXX)

書評

八幡大菩薩の世界

須磨和啓

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館(以下「資料館」という)は、赤塚古墳より出土した「三角縁神獸鏡」は、宇佐市民は勿論のこと、大分県民にとっても貴重な文化遺産である。今回、資料館が五年ごとに開催する八幡展の一環として、去る昭和六十一年十月に、「八幡大菩薩の世界」展を開催した。全国から八幡神やぐらに由緒のある文化遺産を次々に集結し、展示公開した。その解説図録が『八幡大菩薩の世界』である。本書は三章からなる。第一章は「八幡神の成立」で、古代の宇佐と八幡神、御許山と御澄池、放生会と行幸会、応神天皇と八幡神の各節に分けられている。八幡神の出自の神秘性、豊前地方の渡来人と中央政府との関係などについて述べている。